

2022年12月5日（月）

老球の細道704号

### 日本サッカー、アップ、アップセット

会津バスケットボール協会 室井 富仁

「ほぼみんなが負けると思っていたドイツ戦に勝ち、ほぼみんなが勝つと思っていたコストリカ戦に負ける。最後にスペインを逆転で下して新たな快挙を達成した」フランスの新聞『フィガロ』は「予測不能の日本！」と報じた。

私たちの諺には「柳の下にドジョウは2匹いない」というのがあり、一度上手くいったからといって、いつもうまく行くとはいかぎらないという意味で使われている。しかし「一度あることは二度ある」という格言もある。最近孫と何回も大物のアメリカザリガニを捕まえた。

連日日本のマスメディアはサッカーフィーバーである。ちっぽけな嫉妬心は捨て、私もその流れに乗って今回の「ドーハの奇跡」についてバスケットボールに参考になるようなことはないかと探している。その中で3つのことについて発見があった。

一つは、戦術についてである。元日本代表監督の岡田武史氏は朝日新聞で次のようなコメントを書いている。「W杯で勝負を分けるのは戦術がどうかではない。ボールにあと50センチ寄せるとか、細かいことをいかに徹底できるかだ。失点の場面もクロスを入れる選手に対して寄せ切れていない。届かなくても、全速力でプレッシャーをかけていれば、精度の高いボールは入らないものだ」

トップレベルの戦いはディフェンスを変えたから、特別なフォーメーションを使ったからどうだとかではなく、あくまでも基本的なこと、細かい所を徹底してやりぬくことにある。かつてNCAA強豪校テキサス大学H・Cシャカ・スマートはディフェンスの戦術について「魔法の方法」などない。全速力でハリバックをし、ボールに激しくプレッシャーをかけ、リバウンドにとびつく。それを前半、後半の20分やり切るだけだと言っていた。

二つ目は、コーチはぶれないということ。今回の森保監督は常に穏やかな立ち振る舞いが注目されている。数多くの逆境を経験しながら身についたのだろう。コーチは批判されてなんぼのもの。勝っても負けても批判を受ける宿命にある。「コーチが思うほど選手、保護者、周囲は思っていない」が前提である。そうと思えば、いくら批判されてもぶれることはない。

三つめは、選手育成についてである。日本フットボール学会会長は「クラブの下部組織が主に育成を担う欧州と異なり、日本では学校の部活動や街のクラブにJリーグの下部組織が加わった。今の代表選手は様々なルートから、トップにたどり着いている。多様な育成の場であることが相乗効果を生み始めた」と言っている。バスケットボールも似たような状況でサッカーを追いかける。しかし、これから中学校は部活動がなくなる方向にある。良い相乗効果が今後も続くだろうか。

ワールドカップ・サッカーはアップ、アップセットを達成したとはいえ予選リーグはまだ終わったばかりである。これから本物の戦いが展開される。満足した時点でアップ、アップと沈むことになる。改めて確認した「強いチームなどない。勝ったところが強い」と。